

|         |                                    |           |  |
|---------|------------------------------------|-----------|--|
| 氏名      | 加 古 美奈子                            |           |  |
| 授与した学位  | 博                                  | 士         |  |
| 専攻分野の名称 | 文                                  | 学         |  |
| 学位授与番号  | 博甲第2030号                           |           |  |
| 学位授与の日付 | 平成12年 3月25日                        |           |  |
| 学位授与の要件 | 文化科学研究科人間社会文化学専攻<br>(学位規則第4条第1項該当) |           |  |
| 学位論文題目  | 與謝野晶子研究<br>—第一次『明星』期を中心に—          |           |  |
| 論文審査委員  | 教授 工藤 進思郎                          | 教授 渡邊 護   |  |
|         | 教授 下河部 行輝                          | 助教授 田仲 洋己 |  |
|         | 元大谷女子大学教授                          | 入江 春行     |  |

### 学位論文内容の要旨

本論文は、與謝野晶子の多彩な文学活動のうち、雑誌『明星』の創刊（明治33年4月）から終刊（同41年10月）に至る期間を中心に、第一歌集『みだれ髪』以下の諸作品に見られる晶子の思想・文芸論について検討するとともに、特に西欧における世紀末絵画や、源氏物語など日本の古典作品が、晶子の文学世界に与えた影響等についての考察を通して、晶子の創作意識の本質に迫ろうとしたものである。既発表論文7編を取り込みながら、新たに書き起こした章・節を加えて、全体を大きく3章にまとめた。ワープロ打ちでA5判411頁、400字詰に換算して約1,230枚に及ぶ論文である。

#### 第一章 與謝野晶子の創作活動とその背景

第一歌集『みだれ髪』のほか、晶子の詩歌・美文・小説・評論など様々な文芸形式の作品に見られる晶子の思想・文芸論について検討した。第一節「與謝野晶子『みだれ髪』の成立」では、『みだれ髪』に関する多くの同時代評に検討を加えることによって、従来、時代的な制約による無理解としてのみ扱われてきた「誹謗」の言説にも『みだれ髪』の本質を見抜いていた一面があることを指摘するとともに、後年の晶子による『みだれ髪』の改作例の検討を通して、そうした批判の言説と晶子自身の意識との間に見られる齟齬を具体的に検証した。第二節「『みだれ髪』の表現と短歌という詩形式」では、美文「はたち妻」と『みだれ髪』との表現面の比較を通して、短歌によって重層的に形成された『みだれ髪』の世界像が、「はたち妻」には凝縮して描かれているとして、晶子が「短歌という詩形式」によって文学的出発を果たしたことの必然について論じた。第三節「與謝野晶子と「近代恋愛」」では、美文「経机」を素材に晶子の「非婚主義」の思想の特質をその後の評論を交えて考察し、トルストイの影響が看取されることを指摘するとともに、「みだれ髪の晶子」の一般的な印象とは異なる、晶子自身の純潔主義に根ざした理想像が存在するとした。第四節「與謝野晶子の小説と田山花袋『蒲団』批判」では、「産屋物語」等に見られる『蒲団』批判を通して晶子の小説観を探るとともに、「モデル小説」とされる晶子の『明るみへ』や『雲のいろいろ』には、事実を反映させながらも独自の虚構化によって繰り返し語られる主題が存在することに注目した。

#### 第二章 與謝野晶子と美術—『みだれ髪』と絵画表現をめぐって

雑誌「明星」は文学・美術の総合誌として企図され、同時代の西欧における世紀末芸術やアール・ヌーヴォーの雰囲気絵画を介して摂取しているが、晶子自身の作品にも様々な絵画的な要素が反映されている。第一節「『みだれ髪』の色彩表現」では、『みだれ髪』に見られる色彩語を取り上げ、その特色と背景、象徴性について考察を加えた。「紅」や「紫」をはじめ晶子が用いた多くの色彩語は、当時の流行や、源氏物語などに描かれた色目などを摂取しつつ、独自の象徴性を付与されることで『みだれ髪』を特色づけている。

第二節「『みだれ髪』の「髪」と「アール・ヌーヴォー」」では、一条成美・藤島武二らによる「明星」の表紙絵や挿画にアール・ヌーヴォーの影響が看取されることを指摘するとともに、特に『みだれ髪』に詠まれた「髪」の表現と「水」のイメージが重なる時、そうしたアール・ヌーヴォーの髪絵の絵画的表現に通じる印象を鮮やかに象った歌になっているとした。第三節「『みだれ髪』の「髪」と世紀末絵画、「ファミ・ファタル」」では、晶子の「髪」の表現を介して、世紀末絵画の主要なモチーフである「ファミ・ファタル」（運命の女）の姿が、いち早く『みだれ髪』の世界に造形されていることを論じた。第四節「與謝野晶子と夏目漱石—絵画的表現の比較」では、二節、三節で見たアール・ヌーヴォー、世紀末絵画といった絵画的な素材を媒介として、夏目漱石の初期作品「草枕」「虞美人草」等の女性像を取り上げ、『みだれ髪』それとの比較を試みた。

### 第三章 與謝野晶子と古典—『源氏物語』を中心に

近代絵画とは対照的でありながら、『みだれ髪』以降の作品に投影されている古典的情緒に関わる諸問題を取り上げ、古典の現代語訳のことも含めて多方面からの考察を試みた。第一節「與謝野晶子の生涯と古典、『源氏物語』」では、晶子が少女期から耽読した源氏物語をはじめとする古典文学の享受の実態を跡づけるとともに、「晶子源氏」と呼ばれる『新譯源氏物語』及び『新新譯源氏物語』の書誌、訳文改訂の経緯、諸本間の異同、成立と評価の問題等について検討した。また「晶子源氏」と関連の深い『源氏物語礼讃』の成立事情と所収歌の評釈を附した。第二節「與謝野晶子における古典の受容」では、晶子の短歌に源氏物語の古典的情緒がどのように投影されているかを、具体的な作品の解釈を通して検討し、新たにその典拠を指摘した例も少なくない。特に女性の「髪」を詠み込んだ歌、末摘花・蓬生両巻を踏まえて成ったと思われる歌に注目するとともに、晶子の創作童話への源氏物語の投影についても考察を加えた。第三節「與謝野晶子と古典の意義」では、晶子の古典研究として「紫式部新考」を取り上げ、源氏物語研究史上の意義について検討するとともに、他の評論に見られる多くの言説と併せて、晶子における古典の意義について論じた。

### 結 與謝野晶子の作歌意識—晶子の「幻想」と浪漫主義

「美術」や「古典」を積極的に摂取した晶子の作歌意識の本質を、特に晶子が好んで用いた「幻想」という鍵言葉に注目してまとめた。晶子にとって「幻想」とは、まさに「実感」そのものであり、浪漫主義が志向する世界を豊饒にする根幹となる思想だったと考えられるのである。

### 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、国文学分野4名、国語学分野1名の委員で構成し、平成12年2月4日に開催した。本論文を詳細かつ慎重に審査した結果、審査委員が積極的に評価できるとした主要な点は以下のとおりである。

- (1) 『みだれ髪』刊行当時の反響を、多くの同時代評を丹念に読み込むことによって跡づけるとともに、従来もつぱら時代的な制約による無理解として扱われてきた誹謗の言説にも『みだれ髪』の本質を見抜いた一面があり、また賛辞とされる批評にも晶子自身の作歌意識との齟齬が認められるとした。
- (2) 後年の晶子による『みだれ髪』の改作については、一般に同歌集の魅力を減ずる「改悪」とされているが、筆者はこれらの改作歌に、当初の非難に対する晶子の違和感と弁解にも似たはかない抵抗の痕跡を読み取ることで、新しい知見を示した。
- (3) 『與謝野晶子全集』未収録の美文「はたち妻」の考察を通して、晶子が「短歌という詩形式」によって文学的出発を果たした必然性を引き出すとともに、同じく「経机」に描かれた少女の生き方に、晶子の純潔主義・非婚主義思想の原点が認められるとした。
- (4) 晶子の『新譯源氏物語』及び『新新譯源氏物語』の諸本調査を通して、『新譯』における訳文の改訂が、従来の指摘より10年以上も早い大正3年刊行の縮刷本に施されていた事実を発見するとともに、非凡閣版『現代語譯源氏物語』所収の晶子訳を『新新譯』の原型を示すものとして定位した指摘も新しい。
- (5) 晶子の短歌における源氏物語の受容に関して、新たな典拠を指摘するとともに、説得力のある旧説批判を展開した。
- (6) 総じて関係資料の調査、先行研究への目配りもよくできており、上記のほかにも新見

として見るべきものが少なくない。意欲的な力作として晶子研究に一石を投じる論文となっている。

一方、審査を通じて指摘された問題点もないわけではない。内容に関わる点として、

- (1) 歌人としての晶子にとって鉄幹の存在は大きい。本論文ではその点に関する配慮が欠けており、歌の善し悪しを含め、鉄幹との作品上の影響研究を深める必要がある。
- (2) 晶子の純潔主義・非婚主義思想の形成に預かったものとして、少女期から耽読した平安朝物語の「清浄な貴婦人」への憧れとともに、トルストイの影響を指摘しているが、両者の関係についての詰めが不十分である。
- (3) 納得できる指摘は沢山あるが、晶子における「古典」の意義や、晶子の言う「実感」と「古典」との関係は、さらに究明してほしい点である。
- (4) 『源氏物語礼讃』に関連して、定家の「源氏物語卷名和歌」と上田秋成の「卷名和歌」を取り上げているが、前者は「伝定家作」と見るべきでものもであり、また晶子がこれを見ていたか否かの問題もある。

などの指摘があった。しかし、これらの点の多くは欠陥というよりも、今後さらに研究を深め発展させる上での期待といった趣旨のものであり、本論文に示された研究成果を大きく損うものでないことが確認された。

審査委員会は、以上の事柄を総合的に判断し、本論文を博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意した。